異学年交流の中で自然に学ばせるICTの有効活用と情報モラル
～学校行事への取り組みの中で～

北海道深川市立一巳小学校
代表　竹内　一裕（北海道深川市立一巳小学校　教諭）

大島　恵一（北海道由仁町立三川中学校　教諭）　荘司　美晴（北海道深川市立一巳小学校　教諭）
川田　哲也（北海道深川市立一巳小学校　教諭）　粟井　康裕（北海道深川市立一巳小学校　教頭）
長谷川　元洋（金城学院大学　准教授）

要 約

携帯電話の普及や所持の低年齢化、各家庭への PC の普及や高速ネット回線が整備され、子どもが容易にネット社会に入り込むことができるようになった。

小学校学習指導要領には、「各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や情報機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」とある。また、5年生及び第6学年においては、道徳の時間において、「児童の発達の段階や特性等を考慮し、情報モラルに関する指導に留意する」ことが記載されている。

そこで本研究は、学校行事の取り組みの中に、意図的に異学年交流を盛り込み電子掲示板などを使用しながら交流を行うことで、子どもたちが自然にICTを活用し情報モラルを身につけられるのではないだろうかと考えた。

研究の方法について、学校行事の取り組みの中に電子掲示板を使った学習活動を意図的・計画的に盛り込み、つぶやきや電子掲示板への書き込みなどから子どもたちの情報モラルに対する意識の変化について観察した。

異学年交流を中心に様々な実践を行った結果、3年生段階である程度の PC 操作スキルを習得させることで、4年生以上での PC を利用した学習活動の展開の中で情報モラルの指導を行うことが可能であることがわかった。また、電子掲示板というツールが、学校現場の限られた時間数の中で情報モラル指導を行うには非常に効果的であることがわかった。さらには、電子掲示板が学校行事の取り組みの中で異学年交流を行うためのツールとなり得ることも証明することができた。

しかし、教師間の打ち合わせ・連携や指導観などの点で課題も残った。

代表者勤務校：北海道深川市立一巳小学校

1. 研究の背景と目的

平成23年4月から新学習指導要領が全面実施となった。総合的な学習の時間が削減され、国語、社会、算数、理科といった主要教科授業時数の増加や、小学校5年生からの英語必須化など、子どもたちを取り巻く学習環境が大きく変化した。

情報教育もまた、今回の改訂により新たな項目が盛り込まれた。小学校学習指導要領には、「各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や情報機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」とある。また、5年生及び第6学年においては、道徳の時間において、「児童の発達の段階や特性等を考慮し、情報モラルに関する指導に留意する」ことが記載されている。

それらの背景には、子どもたちを取り巻く環境の変化が考えられる。携帯電話の普及や所持の低年齢化、各家庭へのPCの普及や高速ネット回線が整備され、子どもが容易にネット社会に入り込むことができるようになった。「子どもたちのインターネット事件　～親子で学ぶ情報モラル～　」(2006 東京書籍　長谷川元洋)で長谷川は、「インターネットは、もはや社会になくてはならないシステムとなっています。インターネットを活用することで、時間やお金を節約したり、手に入れることが難しい品物を手に入れたり、遠距離の人と交流したりすることが可能になり、自分の生活や仕事の中で、じょうずに活用している人がたくさんいます。

一方で、見ず知らずの危険な人と出会ったり、思わぬトラブルに巻き込まれたりしてしまって、精神的、経済的に大きな被害を受けるケースも発生しています。必ずしも安全な道具というわけではなく、何をどうすると危険であるのかを教えたうえで、子どもに使わせる必要があります。

しかし、インターネット上で子どもが引き起こすトラブルの特性として、「親や教師が知らないところでトラブルが起こり、気がついたときには、子どもを守ることができない状態になっている」ことがあります。そのため、他のケース以上に予防教育が重要だといえます。しかしインターネットについては、親や教師よりも子どものほうがよく知っているケースが多く、親や教師が子どもに教育するだけの知識を身につけていなかったり、インターネットの危険性を認識していなかったりしています。

自分の子どもを被害者、加害者にしないために、大人がしっかり知識を身につけ、子どもを守ってあげる必要があります。また有効性をよく理解して、便利な道具をよりじょうずに使えるように教えてあげる必要があります。」と述べている。

北海道深川市立一巳小学校は北海道空知地方北部に位置し、全校児童328名(平成23年4月1日現在)、周りを田園が囲むのどかな雰囲気にある学校である。PC ルームには38台の PC が接続され、ネット環境は光回線が接続されている。第6学年2組の子どもたちに調査を行ったところ、携帯電話所持率は17%とそれほど高くはない。(図1)しかし、家庭に1台以上PC がありネット環境が整っている率は71%とやや高い割合を示している。(図2)両親が共働きで帰宅後に一人で PC を立ち上げネットに接続している子どもも少なくない。子どもたちの会話の中か

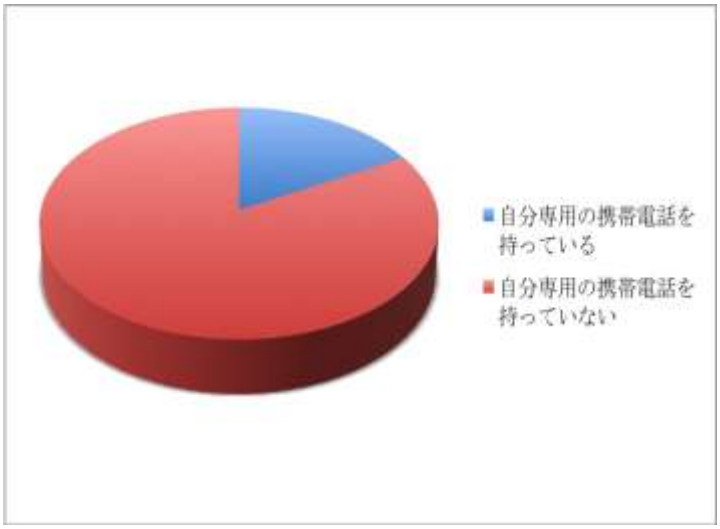

図1

らも、アメーバピグやプロフ、オンラインゲームなどの話題も耳にする。長谷川（2006）が述べているように、インターネットが必ずしも安全な道具というわけではなく、何をどうすると危険であるのかを教えることが学校現場でも急務となっている。

そこで本研究は、学校行事の取り組みの中に、意図的に異学年交流を盛り込み電子掲示板などを使用しながら交流を行うことで、子どもたちが自然にICTを活用し情報モラルを身につけられるのではないだろうかという仮説のもと、以下のような実践を行い、効果を検証した。

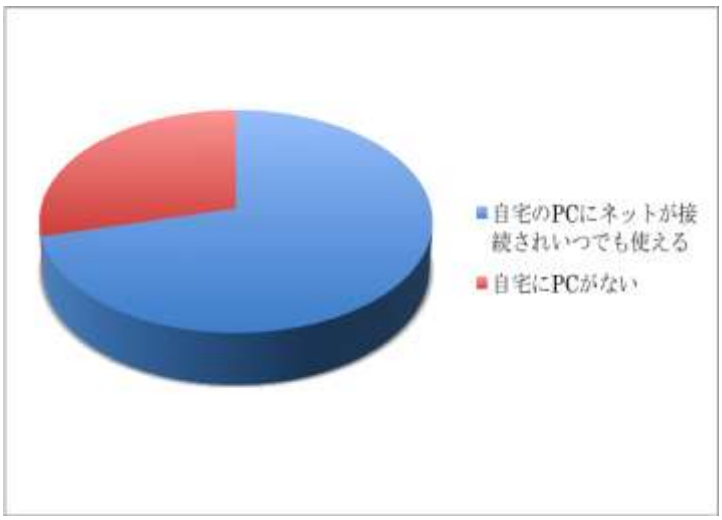

図2

2. 研究の方法

従来から実践している学習活動にICTを活用する場面を設定し、単元展開にそって、学習目標を整理し、情報を活用させる場面と情報モラルに関する指導場面の両方が入るようにして授業を検討した。

3. 実践の概要

3−1. 3年生の実践

(1)社会科における実践

社会科「お店調べをしよう」の単元において、スーパーマーケットやコンビニエンスストア、ドラッグストアなど自分が興味・関心をもったお店を訪問し、そのお店における工夫や努力について調べ学習を行った。（図3−1、3−2、3−3） また、この学習における情報教育の目標は、インタビュー時におけるマナーを掲げた。なお、情報教育の目標については、火曜の会ホームページ（http://kayoo.org/）にある「情報活用能力育成モデルカリキュラム」を参考とした。

子どもたちは熱心に、お店で働く人や買い物に来た方たちに質問をし、しっかりと記録していた。

質問項目については、「このお店のおすすめ商品は何ですか？」「その商品が売れるよう、どのような工夫や努力をしていますか？」「このお店には何を買いに来ましたか？」「このお

図3−1　調べ学習を行う子どもたちの活動の様子

図3−2　お客さんにインタビューする様子

店のどのようなところが気に入っていますか？」など、後ほど行うまとめの活動につながるよう、お店での販売方法の工夫やどんな商品を購入しにきたのか、またそのお店の気に入っているところなど、様々な角度からお店の工夫や努力に迫ることができるようあらかじめ指導した。また、「私たちは一巳小学校の3年生です。社会科の学習でお店のことについて調べています。質問してもよろしいですか？」と、きちんと相手に伺いをたててから質問していた。

図3−3　お店の工夫や努力について学習する様子

(2)5年生との交流学習1

社会科「お店調べをしよう」の単元の学習を一通り終え、自分たちが調べた内容についてのまとめの学習を、総合的な学習の時間を使い横断的に行った。本校では3年生から本格的にPCを使った授業を行うが、タイピング等十分なスキルが身についていないため、ツールは壁新聞とした。

壁新聞の書き方については、5年生からアドバイスをもらうこととした。(図3−4、3−5)　この年5年生ではNIE(News In Education)の取り組みを行っていたためである。「記事には第1記事と第2記事がある。一番伝えたいことを書くのが第1記事。」「見出しの工夫も重要。見出しを見ただけでどのようなことが書かれてあるのか一目で分かるようにする必要がある。」「あとがきでは、協力していただいた方やお店などにお礼の言葉を書いたり、書いてみての感想を書いたりする。」など、自分たちが実際に作成した壁新聞を見本に、しっかりとアドバイスをしていた。

図3−4　壁新聞の書き方を教わる様子1

図3−5　壁新聞の書き方を教わる様子2

(3)壁新聞の作成と情報モラル指導

5年生からのアドバイスを受けて、社会科「お店調べをしよう」の単元で学習したことをまとめていった。まず、それぞれがお店で記録した内容について述べ合い、重複した事柄や特に重要だと思われることについて記事として扱おうという大まかな流れを全体で確認した。その後グループに分かれ、重複した内容やお店の工夫や努力について重要だと思われることについて話し合い、記事を選定していった。(図3−6) 選定作業が終わると、それぞれの記事の担当を決め、原稿を作成していき、模造紙に書き込んでいった。(図3−7)「この記事の中で一番伝えたいことはこの部分だから色を変えよう。」「インタビューのときのマナーについても書いた方がいいんじゃないか。」など、試行錯誤しながらも、グループで話し合い、形にしていった。

図3−6 記事の選定作業の様子

同時に、写真についてのモラル指導も行った。ここでは肖像権や撮影した写真の扱い方と、その写真を使うことで何を伝えたいのか、つまりメディアの効果である。指導では、情報モラル指導用のアニメーション DVD を使用した。アニメーションを視聴した後の子どもたちからは、「人の写真を勝手に使ってはいけないことは知らなかった。」「友だちに消しゴムを借りるときに貸してと言うのと同じだということがわかった。」などといった学習感想が挙げられた。

図3−7 模造紙に記事を書き込んでいく子どもたち

(4)5年生との交流学習2

5年生から受けたアドバイスをもとに壁新聞にまとめた学習内容を、実際にアドバイスをもらった5年生に向けて情報発信する活動を行った。自分たちが本当に伝えたいことが相手に伝わるか、5年生には以下の観点で3年生の発表に対する評価を依頼した。

○姿勢よく、大きな声で話すことができていたか。
○お店の工夫や努力が理解できたか。
○メディア(写真)の効果は適切か。

評価はポストイットを使用し、青色のポストイットには良かった点を、黄色のポストイットには改善点を、それぞれ1枚につき1項目を記入することとした。(図3−8)

○姿勢よく、大きな声で話すことができていたか。
　この項目については、どのグループも評価が高かった。「声が大きくて聞き取りやすかった。」「発表していない人もしっかりと前を向いていた。」などの記入が多かった。

○お店の工夫や努力が理解できたか。
　この項目については、いくつかのグループで改善点が寄せられた。「お店の工夫や努力について、具体的な内容がわからなかった。」「いろいろな工夫や努力について知ることができたと書いてあるが、そのいろいろが書いてなければ意味がない。」「いろいろという言葉はとても便利だけれど、詳しく伝えるにはそのいろいろが何かを伝える必要がある。」などの指摘が記載されていた。

図3−8　ポストイットに評価を記入する5年生

○メディア（写真）の効果は適切か。
　この項目についての記載は少なく、記載された内容からも概ね良いと判断できるものであった。

（5）ブラッシュアップ活動

　5年生からのポストイットをもとに、自分たちの発表についてブラッシュアップする活動を行った。（図3−9）　特に多かった「いろいろ」については全体の話題として取り上げ、今後どのように改善すればよりよい発表となるか話し合った。「いろいろという言葉のところにどんな言葉や内容が入るか考えて発表したら、お店の工夫や努力がもっとよく伝わると思う。」などが挙げられた。このことを踏まえ、自分たちの発表内容がより具体的な発表となるよう話し合い、よりよいものへと仕上げていった。

図3−9　ポストイットを参考に話し合う3年生

　そして2日後の参観日で、今度は保護者に向けて発表を行った。（図3−10）　指摘があったグループも、いろいろという言葉の変わりに具体的な内容を盛り込んだことでより詳しい説明がなされ、保護者の方々から「3年生とは思えないほど詳しく説明していた。」と、子どもたちの発表内容に大きな変化が見られた。

図3−10　保護者に向けて発表をする3年生

3−2. 4年生の実践
(1)学校行事(已小フェスティバル)を活用した交流学習

一已小学校では毎年12月に、「已小フェスティバルという学校行事が開催される。高学年が出店したお店に、低中学年が来店する取り組みである。出店例としては、理科実験を応用したべっこう飴体験や、体育実技と関連させたキックターゲットなど、低中学年が楽しめそうで且つ学習活動の要素が含まれるものに限定される。毎年高学年がアイデアと工夫を凝らしながら進める学校行事である。(図4−1、4−2)

本研究を実践する前までは、高学年が企画運営を行い、各クラスで活動の反省をして終わるというのが通例であった。しかし本研究をきっかけに、そこに ICT を活用する場面を設定し、情報を活用させる場面と情報モラルに関する指導場面を盛り込むことを、高学年担当の教諭を中心に検討した。また、検討助言者として、本研究の助言者でもある金城学院大学長谷川准教授にも加わっていただき、検討を進めた。その結果、電子掲示板を使った異学年交流を行うこととした。(図4−3、4−4)

図4−1　べっこう飴づくりに挑戦する子どもたち

交流する内容としては、5年生のお店に対して4年生が感じた良かった点と改善点についてである。それを受けて、5年生は4年生に返信をする。どちらの学年も、読み手に誤解を与えず自分の本当に伝えたいことを伝えるにはどう書き込んだらよいのか、考えながら活動を進めることでモラル指導も行うことができると考えたのである。

図4−1　理科室でのスライムづくり体験の様子

また、対象を4年生と5年生とした理由としては、2つ挙げられる。一つは、3年生から少しずつ PC の操作スキルの向上に取り組んでいるため、4年生段階である程度頭の中で思い浮かんだ文章をタイピングするだけのスキルが身についているであろうということである。もう一つは、4年生が次年度進級したときに、今度は自分たちが已小フェスティバルの企画運営を行う立場になり、自分たちが挙げた前年度の改善点を直接生かすことができるからである。

電子掲示板を活用する前に、4年生5年生それぞれでモラル指導を行った。「情報活用能力育成モデルカリキュラム」を参考に、4年生のモラル指導は以下の3点を中心に指導した。なお、モラル指導については、情報モラル指導用のアニメーション DVD を使用した。

〇受け手の気持ちを考えて情報発信する。
〇情報発信や情報のやり取りの場合のルールやエチケットを知り、守る。
〇他の人の発信した情報の良いところを見つける。

今日は、べっこうあめを、焼いてくれてありがとうございます！
とっても親切にしてくれてとっても良かったんですが、
もう少し人を、増やした方がいいと思います。

Re: 已小フェスティバル反省 アーカ - 2010/12/21(Tue) 14:31 No.338

今日は、たのしかったです。べっこうあめがとてもおいしそうでした。家庭科室には、いいかおりが広がってました。まだ食べていませんが、べっこうあめを食べるのをとても楽しみにしてます。

Re: 已小フェスティバル反省 エグザイル - 2010/12/21(Tue) 14:55 No.344

今日は、べっこうあめを食べさしてくれてありがとうございます。おいしかったです。

Re: 已小フェスティバル反省 ムーミン - 2010/12/24(Fri) 09:45 No.356

ヨッシーさんへ
ありがとうございます(^ - ^)
ほかにもカルピスの味をやってみたんですが失敗しました

ラッキーさんへ ★うさぎ★ - 2010/12/24(Fri) 09:51 No.364

ありがとうございます。次やるときも、たぶんおいしくできると思いますよ！ぜひ食べてみてくださいね☆こげなくて、成功したらおいしいですよ！！

Re: 已小フェスティバル反省 AKB48 - 2010/12/24(Fri) 10:02 No.383

ちーサンへ お返事有り難うございマス！！ ちーサンは、来年べっこうあめ作りたくなりましたか？もし、出来たら、行かせていただきマス！！！！！

Re: 已小フェスティバル反省 謎のプリンス - 2010/12/24(Fri) 10:03 No.386

くりさんへ
良い所と悪い所をおしえていただきありがとうございました。鉄板の件は、何分でできるか、はかってみます。
(' - ')

Re: 已小フェスティバル反省 ブリッツ - 2011/01/20(Thu) 13:44 No.398

5年生のみなさんへ 私、個人的にべっこうあめは好きなのですが、べっこうあめに時間がかかり、他のところに全くいけない年がありました。しかし、今回は、前回よりだいぶ早く出来上がって他のところに回れました。べっこうあめは全校のみんなが好きだと思うので私もべっこうあめを作りたいです。また、べっこうあめを作るコツなどアドバイスがありましたら教えてください。お返事お待ちしております！！！

Re: 已小フェスティバル反省 ヨッシー - 2011/01/20(Thu) 13:58 No.415

ムーミンさんへ ありがとうございます
ぼくは、しゃてきやってみたいので
何かアドバイスがあったら教えて下さいおねがいします

Re: 已小フェスティバル反省 かっち - 2011/01/21(Fri) 09:01 No.429

図4−3 電子掲示板の書き込み画面

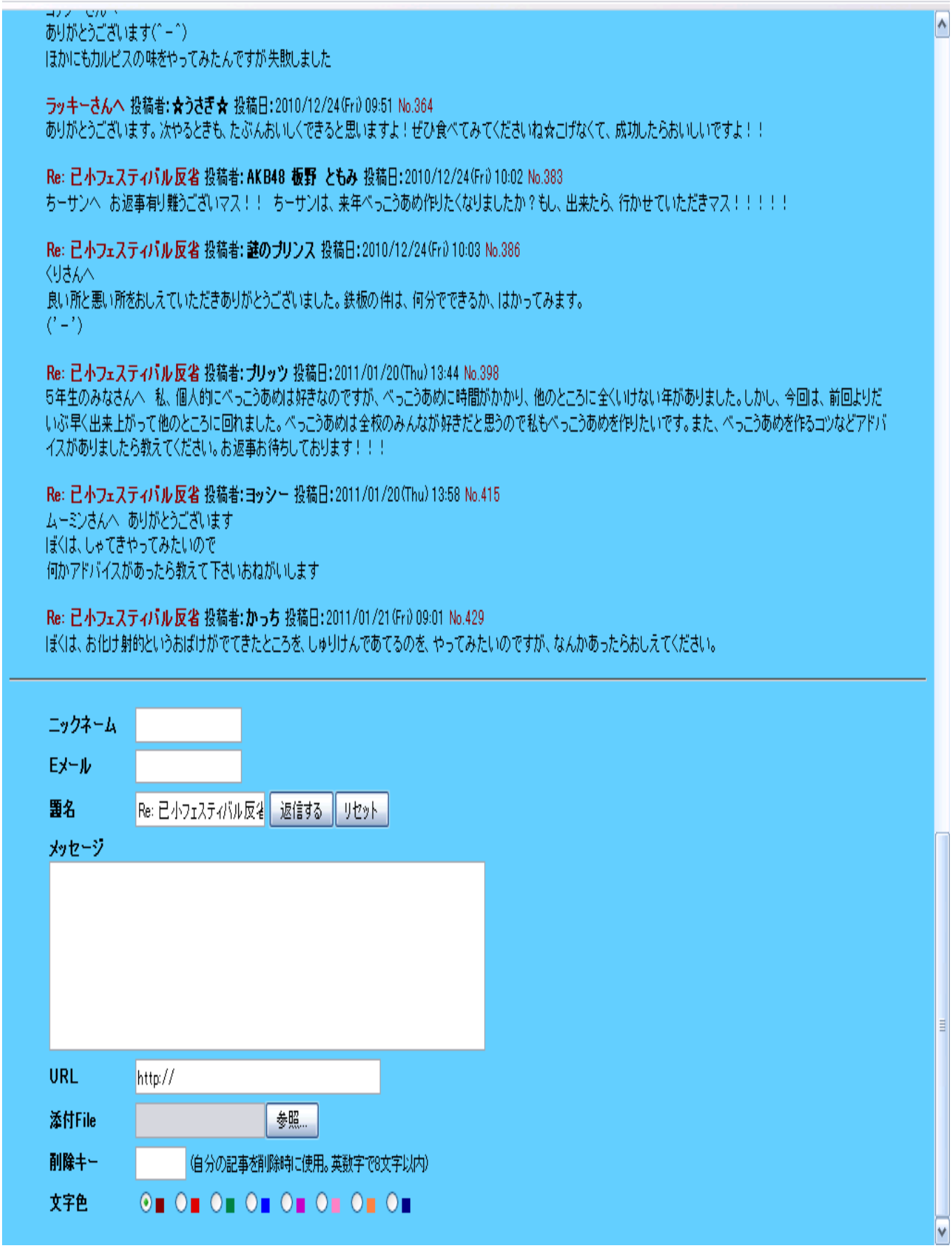

図4−4 電子掲示板の書き込み画面（返信画面）

なお、交流した具体的内容については、「3−3．5年生の実践」の中で述べることとする。

3−3．5年生の実践
(1)4年生との交流学習

巳小フェスティバル後の、電子掲示板を使った4年生との交流学習に至るまでについては上記で述べた。ここではその内容について記載することとする。

5年生も4年生と同様、電子掲示板を活用する前にモラル指導を行った。「情報活用能力育成モデルカリキュラム」を参考に、5年生のモラル指導は以下の4点を中心に指導した。なお、モラル指導については、情報モラル指導用のアニメーション DVD を使用した。

○考えたことや自分の意図が相手に伝わりやすいよう話を組立てる。
○自分と異なる意見や立場を、理解しようとする。
○掲示板・ブログやチャットなどで個人情報を漏らさないよう意識する。
○匿名性の特性を知る。

5年生は学年で4つの出し物(出店)をした。電子掲示板では、4店のカテゴリに事前に分けておき、4年生にまずそれぞれ自分が訪れたお店について書き込みを行ってもらい、5年生は自分の出店したお店の書き込みについて返信をした。(図5−1、5−2)事前に指導を行ったため、相手が下の学年であってもコメントに対し「コメントありがとうございます。」など、しっかりとお礼の文章から書き込むことができていた。

また、今回掲示板には自分の本名ではなくニックネームを使用することとした。児童が自分の書き込みに責任をもつことができるよう本名での書き込みも考えたが、匿名性の特性や重要性、掲示板やブログなどで個人情報を漏らさないことをしっかりと理解させるためにニックネームを使用した。

図5−1　電子掲示板による4年生との交流学習の様子

4年生の書き込みに対し、「順番待ちが長かったり、ルールがよくわからないまま取り組んでいたりしていたことがわかった。」「自分ではあまり気がつかなかったことに気がつくことができた。今回は自分たちのお店を準備することに精一杯で、来てくれる人の目線に立っていなかった。来年の出店の際に気をつけたい。」など、自分た

図5−2　熱心に掲示板に書き込みを行う子どもたち

ちの活動の反省点が見えたようで、そのことを踏まえながら返信をしていた。その返信に対し4年生も、「自分たちが来年取り組むときには、気をつけたいと思います。」など、来年の活動の見通しを立てる参考となったようであった。

(2)誹謗中傷の書き込み

しかし、活動の途中で誹謗中傷と判断できる書き込みが見つかった。返信の時間帯とニックネームから、5年生による書き込みであることがすぐにわかった。ニックネームについては、教師側で誰が何のニックネームを使用しているかあらかじめ記録しておいた。個別指導を行うか全体指導を行うか、研究実践者で話し合いを行った。しかし意見が分かれたため、助言者である長谷川准教授とオンライン会議で助言をいただき、全体指導を行うこととした。

全体授業は1時間で、前半は事実の確認と、誹謗中傷の書き込みを読んで読み手がどう感じるかを子どもたち同士で話し合わせ意見を述べさせた。「せっかく4年生が一生懸命良い点や改善点を書き込んでくれたのに、悲しい気持ちになると思う。」「来年に向けて意気込んでいたときにこんな書き込みが5年生からあったら、せっかくのやる気も失せてしまう。」「この書き込みは読んでいて不愉快だから消すことができないのか。」など、様々な思いや意見が出された。

図5−3　長谷川准教授の授業を熱心に聞く子どもたち

後半は掲示板の管理者でもある長谷川准教授がオンラインで授業を行った。子どもたちが交流に使っている掲示板のデータが、金城学院大学長谷川研究室のサーバに送られていることや、インターネットの仕組み、一度電子掲示板に書き込んだ内容は管理者に削除依頼を行わない限り消すことができないこと、たとえ削除されたとしても、誰かがデータをコピーしていたら削除することはなかなか難しいこと、小学生であっても一般の掲示板に危険な書き込みをすると警察が動く事態になることなどを、資料を提示しながら指導した。「インターネットがこんなに恐ろしいものだとは思わなかった。」「少し怖くなった。でも、正しい使い方をすれば便利なのは確かだ。」「インターネット上では大人だと思っても実際は子どもだったり、逆に子どもだと思っても大人だったりすることもある。どうやったら正しく判断できるのか。」と、様々な思いを子どもたちは抱いていた。また、長谷川准教授が「この書き込みは消してほしいですか？」という問いに子どもたちは、「お願いします。」と削除依頼を行った。

図5−4　インターネットの仕組みについての説明

(3)NHK 放送体験学習

一已小学校では、毎年5年生が NHK の主催する「君が主役だ！NHK 放送体験クラブ」に参加している。この事業は、放送の仕組みなどを見学・学習するだけではなく、子どもたちが取材・出演して子どもたちが収録する模擬ニュース番組の収録体験学習形態をとっている。参加を通し、テーマを決め、それについて調べ、まとめた内容を相手に伝えるのだが、相手にわかり易く伝えるために、その説明内容や手段について工夫するなど、調査・発表することの大切さや難しさを学ばせようとするのがこの事業のねらいである。

図5−5　番組の台本の内容について話し合う子どもたち

番組の内容については、総合的な学習の時間に調べ学習を行った「一已の歴史について」をテーマとした。また番組作成に対し、「情報活用能力育成カリキュラム」にある以下の3点を意識しながら活動を行った。

○コマーシャルを企画し、画像や映像で表現する。
○発信しようとする情報の根拠を示せる。
○作成した画像（映像）が、どのように受け取られるかを互いに確認する。

今回はコマーシャルではなく番組作成であったが、番組における情報の根拠や果たしてその画像（映像）を使うことによって何を伝えたいのか、本当に自分たちの意図が伝わるのかを考えさせ、話し合わせながら活動を進めた。（図5−5）「キャスターが話している内容と映像があっていない。」「キャスターやリポーターの話す内容を変更してはどうか？」など、自分たちが何を一番に伝えたく、そのために必要な情報は何であるのかを何度も話し合い、練り直しながら形を作っていった。（図5−6）またこの学習を通して、肖像権や著作権についても再度確認し、必要な場合は許可をとってから使用することをしっかりと押さえた。

図5−6　番組を作成する子どもたちの様子

(4)スライドショー作成

3月には、1年間で学習したことをスライドショーにまとめる活動を行った。国語の作文単元と総合的な学習の時間を横断的に活用しながら学習を進めた。テーマは「1年間を振り返って。」とした。1年間の中で自分が大きく成長したと思われる部分や頑張ったこと、この1年で学んだことなどを映像と言葉で伝えた。

画像は、担任が1年間の活動を記録していたものを使用した。その中から子どもたちが画像を選び、スライドを作成していった。ソフトは Macintosh の iMovie を使用した。

まず、自分の作文を完成させ、文章を読み終わるのにどれくらいの時間がかかるのかをストップウォッチを使って計測した。その時間に合わせ、スライドショーの時間を設定した。自分が一番伝えたいことは何なのか、そのためにどのような画像を使用するのかなど、今まで学習したことを生かしながら活動を進めた。また複数の画像を使用する場合、どの画像にどれくらいの時間をかけるのか、それは何故か、さらには画像のズームなどすべてに意味をもたせるようにしながら、子どもたちの作成を進めさせた。

図5−7　作成したスライドを見せながら作文を読む様子

完成したスライドは、「マラソン大会に向けた努力」や「勇気を出して積極的に発表できるようになってきた自分」など様々であった。(図5−7)中には「已小フェスティバルでの協力」を内容とし、その後の電子掲示板を使った活動でモラルについて学んだことを発表していた子どももいた。

3−4. 6年生の実践

(1)5年生との交流学習

5年生と6年生との間で毎年11月に行われている「修学旅行報告会」。6年生が修学旅行で学習したことについて壁新聞にまとめ、それを、次年度修学旅行を迎える5年生に伝える活動である。(図6−1、6−2)6年生は学習したことをしっかりと形としてまとめることを、5年生は修学旅行への期待感や見通しをもたせることをそれぞれねらいとしている。

例年は6年生からの報告のみで活動は終了していたが、今年度は報告後に5年生との意見交流を行った。ツールは電子掲示板を使用し、5年生の書き込みに対し6年生が返信する形をとった。電子掲示板を使用した理

図6−1　修学旅行について報告を行う6年生の様子

由として、電子掲示板の「書き込みが劣化せずに残る」メリットが挙げられる。この交流で交流した内容を参考に次年度の修学旅行に生かすことで、よりよく計画することができると考えたからである。また、挙手では恥ずかしさからなかなか質問できない5年生の子どもも、電子掲示板を利用することで発言することができると考えたのも理由の一つとして挙げられる。

交流では、主に自主研修（決められた範囲内において、グループで活動場所や見学場所を決めて見学学習を行う活動のこと）が話題となった。「見学先としてはどのようなところがおすすめですか？」「見学場所を決めるときのポイントを教えて下さい。」「場所に着くまでの交通手段を調べるときに気をつけなければならないことは何ですか？」など、5年生は次年度自分たちが取り組む時のことをしっかりと想定しながら書き込んでいた。それに対し6年生も、自分たちの例を具体的に挙げながら「見学場所を計画するときは、これでは時間が少しあまってしまうのではと思うくらいがちょうどよい。」「バスも電車も種類が多くて迷ってしまうので、事前に番号や行き先などしっかりと調べておく必要がある。」など、自分たちの失敗を次にいかしてほしいという願いをもって親切丁寧に書き込んでいた。次につながる素晴らしい交流となった。

図6−2　報告会では自主研修のポイント等も報告された

4. 成果と課題

4−1. 成果

教育課程上情報モラルの指導に割くことができる時間数は限られており、本研究を行う前までは十分な指導を行うことができないでいた。今年度から小学校では新学習指導要領が施行され、教科書の学習内容の増加や脱ゆとり教育に伴いこれまで以上に情報モラルの指導に割くことができる時間数の確保が難しくなる。PC を利用した学習活動の中で情報モラルの指導も行う形にすることで、特別に時間を割かなくても十分な指導を行える実践を行いたいと考えたのが本研究に取り組むきっかけであった。

3年生段階である程度のPC操作スキルを習得させることで、4年生以上でのPCを利用した学習活動の展開の中で情報モラルの指導を行うことが可能であることがわかったことは大きな成果と言える。

また、電子掲示板というツールが、学校現場の限られた時間数の中で情報モラル指導を行うには非常に効果的であることがわかった。電子掲示板を使った学習は、今後子どもたちが入っていくネット社会の疑似体験学習とも言うことができる。ID やパスワードの入力時には、それらの重要性について指導することができる。自分の書き込みがそのまま画面に反映される楽しさや嬉しさはさることながら、一度書き込むと削除することは容易ではなく、またその情報が何者かによってコピーされ流出してしまいかねないことも、画面を通して直接体験をもって指導することができた。本研究の活動の中で、誹謗中傷と判断できる書き込みを行う子どもも現れた。しかし、この問題行動があ

った恩恵として、子どもたちは誹謗中傷の書き込みとはどのようなものか、それに対してどう感じたか、自分はどう振る舞うべきかについて考えることができたことが挙げられる。ネット社会に踏み出した時にこのような行動をとらないようにするのが授業のねらいであって、ネット社会に踏み出す前にこのような経験をすることができたことは易ということができるであろう。

さらには、電子掲示板が学校行事の取り組みの中で異学年交流を行うためのツールとなり得ることも証明することができた。データがサーバに保存されるため、授業時間を学級・学年間で調整する必要がないためストレスが少ない。「書き込んでおいたので、返信をお願いします。」と相手学級・学年の担任に伝えるだけでよいのである。

また、手紙などのアナログツールは時間とともに劣化してしまうが、電子掲示板に残されたデータは劣化することがないため、例えば巳小フェスティバルのような年1回の行事のための保存であっても劣化の心配がなく、クリックさえすればすぐに1年前の情報を閲覧することができるというのも電子掲示板のもつデジタルデータとしてのメリットである。

4−2. 課題

しかし、課題も残った。

一つは、教師間の連携である。限られた授業時数の中で今後もこの実践を行っていくためには、子どもたちに情報活用能力を育成していくための教師間の共通認識が不可欠である。事前に綿密に打ち合わせを行い、意図的・計画的に教育活動を進めていく必要がある。

もう一つは異校種交流を行うことができなかったことである。今回は学校間の予定が合わず、残念ながら小学生と中学生との交流学習を行うことはできなかった。小中連携の重要性からも、今後必要な活動であると考える。ネットの特性を生かし、今後は打ち合わせを綿密に行い、校内だけではなく小学生と中学生との交流学習を行っていきたい。

（研究協力者）

北海道由仁町立三川中学校　大島　恵一　（前任校：北海道深川市立一巳小学校）
北海道深川市立一巳小学校　荘司　美晴
北海道深川市立一巳小学校　川田　哲也
北海道深川市立一巳小学校　粟井　康裕

（研究助言者）

金城学院大学准教授　長谷川　元洋

（実践場所）

北海道深川市立一巳小学校

（参考文献）

（1）長谷川元洋　編著　2006　東京書籍　「子どもたちのインターネット事件～親子で学ぶ情報モラル～」

（2）火曜の会ホームページ　http://www.kayoo.org/mc-info-literacy2010/　Copyright 2010　情報ネットワーク教育活用研究協議会、パソコン検定協会　All Right Reserved.

（3）文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm